

日本建築学会 優秀卒業論文賞・ 優秀修士論文賞

経過報告



本会では、1989年7月に設立された日本建築学会「建築教育振興基金（タジマ基金）」による学生を対象にした論文の顕彰事業で、「優秀卒業論文賞」「優秀修士論文賞」を設け、優れた論文を表彰している。本年はその第11回である。

本年も多くの方から応募があり、早速、卒業論文等顕彰事業委員会の中に選考部会（部会長：大野義照 大阪大学教授）を組織して選考に入った。同選考部会では、短期間であったが精力的に作業が進められ、厳正なる選考が行われ、表彰論文を決定した。

今回受賞された論文の著者に対して心からお祝い申し上げますとともに、選考部会のご努力に改めて敬意を表す。また、残念ながら選考にもれた論文も内容的には表彰論文と大差なく、いずれの論文も優秀であり、応募に際してのご努力を多とするものである。

この事業は本年で11回目となったが、これまで選考過程で生じた改善を要する事項については、毎年十分に検討・審議のうえ改善しており、事業の意義は、高い評価を得て確立されてきたものと確信している。

なお、本年の公募に際して多大なご尽力をいただいた各大学の関係者に心からお礼申し上げますとともに、今後も本事業に対して深いご理解をいただき、さらなるご協力を賜るようお願いする。（卒業論文等顕彰事業委員会委員長 梅干野 晃）
分野別応募数（総応募数195編/49大学）

構造系卒業論文15編/3	計画系卒業論文55編/8	環境系卒業論文19編/3
構造系修士論文24編/3	計画系修士論文70編/10	環境系修士論文12編/2
構造系論文合計39編/6	計画系論文合計125編/18	環境系論文合計31編/5

※編のあとの数字は受賞数

選考報告



1989年に設置された建築教育振興基金（タジマ基金）による「卒業論文等顕彰事業」は、2000年で11回目となる。選考部会は、卒業論文等顕彰事業委員会の下部組織で、常置の各調査研究委員会から推薦された2名（ただし、構造・環境は各3名）の委員、計24名により構成された。

第1回選考部会は、石村孝夫卒業論文等顕彰事業委員会委員長より招集され、1999年12月16日に建築会館会議室で開催された。選考委員の自己紹介の後、石村委員長より本事業の運営等について説明があり、運営規程、実施要領、選考要領、応募論文募集要項について審議した。1999年（第10回）選考部会からの申し送り事項について審議し、次のような変更がなされた。

1. 従来修士論文については連名を認めていなかったが、このことが応募論文募集要項等に記述されていなかったため、応募論文募集要項1. 応募資格及び実施要領3条（応募資格）

の文言に、大学院修士論文の共著を認めないことを明記することにした。

2. 応募論文概要の書式は2段組とし、応募論文募集要領の見本も前年の1段組から2段組に変更した。

なお、応募論文の評価において、著者の学生がどこまで主体性を持って実施した研究であるか、あるいは貢献度はどの程度か判断しにくい、などの点から11回目になる本制度そのものを見直す時期ではないかとの意見が出た。この点の検討を、教育・文化事業委員会に申し入れることにして、2000年は、研究状況等の応募論文の背景は問わず、提出された論文のみを判断することで選考を実施することにした。

最後に、石村委員長より、選考部会長として大野が指名・承認された。

第2回選考部会は、2000年4月21日に開催し、関係規程類の確認、応募論文数および各部門別分類（構造系、計画系、環境系）の確認を行い、部門別分類に変更がないことを確認した。応募論文数は、卒業論文89編、修士論文106編の計195編で、昨年より34編増加した。応募大学数は49大学で、昨年より5大学多くなった。部門別では、構造系39編（学部15、修士24）、計画系125編（学部55、修士70）、環境系31編（学部19、修士12）であり、それぞれ前年より6編増、28編増、増減なしであった。授賞候補件数については応募件数に応じ、卒業論文は構造系3編、計画系9編、環境系3編の計15編とした。同様に修士論文は構造系3編、計画系10編、環境系2編の計15編とした。各部門ごとにこの授賞候補件数の範囲内で選考を行い、他部門との振り分けなどはしないことを確認した。選考要領について再度確認を行い、選考の基本的な方法は従来どおり二段階選考とした。第一次選考では、各部門の選考委員が論文概要を精読して授賞候補件数の約2倍の論文を選考し、第二次選考では、第一次選考で選ばれた論文1編につき2名の査読委員を定めて本論文を精読し、表彰候補論文を選考することとした。具体的な選考は各部会に一任することとした。各部門の部会を設置し、部会長を互選（構造系：大森博司君、計画系：川本重雄君、環境系：寺尾道仁君）し、選考を開始することとした。

なお、選考は公正かつ慎重に行うことを旨とし、とくに選考委員と応募論文の著者が親族、師弟関係などにある場合には、その論文の選考に関与しないことを確認した。

各部門の選考終了後、第3回選考部会を2000年6月29日に開催し、各部会の部会長から選考経過と選考結果が報告された。各部会の選考結果にもとづき審議し、選考報告および推薦理由書の確認を行い、選考部会出席者全員の一致をもって2000年（第11回）の表彰候補論文として、卒業論文14編、修士論文15編を選考した。

（2000年卒業論文等顕彰事業委員会選考部会長 大野義照）

構造系部会

本年の構造系の応募論文数は、卒業論文15編、修士論文24編であった。応募大学数は20校で、昨年に比べて2校増加した。応募論文の内訳は、構造系25編、材料・施工系14編であり、例年と比べて材料系の応募が増加した。

第一次選考では、5名の選考委員が39編すべての論文の概要

を査読し、三段階評価の採点を行い、卒業論文については上位8編、修士論文については上位7編を第二次選考対象として選出した。第二次選考では、第一次選考を通過した合計15編の論文のそれぞれを2名の選考委員が精読することとした。卒業論文の選考においては、「テーマと内容」「論理性と明確さ」「論文としてのできばえ」の3項目、修士論文では、「テーマの獨創性・新規性」「豊かな萌芽性・将来性」「研究の進め方の論理性」「結論の明確さ」「論文としてのできばえ」の5項目に留意して、総合的な評価点を与え、その得点順位により授賞候補論文を選定することを原則としたが、得点と同じ、あるいはきわめて接近している場合には、選考委員間で改めて慎重に審議した。その結果、最終的に、卒業論文、修士論文のいずれも、各3編を授賞候補論文として選考部会に推薦することとなった。

卒業論文もさることながら、特に修士論文は力作ぞろいであり、いずれを優秀論文として推薦するか、選考委員として苦慮することが多々あった。候補論文の最終選考の段階で、選考委員間の評価の格差を是正すべく、各委員の評点の基準を互いに開陳し合い、そのうえで各論文ができるだけ平等な相対的評価が与えられるよう評点の最終調整を行った。最終的な選考はそのうえで無記名投票により行い、上位3編を候補論文とした。

卒業論文、修士論文ともに、指導教員の指導のもとに行われる研究の集大成であるが、執筆者である学生がその論文のどこまで主体的に貢献しているのかについての実質的な評価は困難である。このことについては、本制度開始以来、繰り返し指摘されてきていることのようにであるが、今回は、提出された論文それ自体を評価することで、将来性のある優れた若い人々をエンカレッジすることを実現するのだということを基本的なスタンスとして選考を行った。ただ、この考え方には少なからず無理があるように感じる。この点については今後も継続して検討を重ねていくことが必要であろう。

(構造系部会長 大森博司)

計画系部会

本年の計画系の応募論文数は、卒業論文55編、修士論文70編の合計125編であり、昨年の卒業論文40編、修士論文57編と比較すると、卒業論文・修士論文とも応募論文数は大きく増えた。応募論文の総数に基づいて授賞候補論文数が各部門に比例配分された結果、計画系では卒業論文9編以内、修士論文10編以内を授賞候補論文として選考することとなった。

第一次選考の前に、応募論文が募集要項の条件を満たしているかどうかを確認した。この段階で、論文概要の書式が応募要項に反していた卒業論文2編を第一次選考の対象から外した。

第一次選考は、論文の概要を1論文当たり5名の委員が査読し、これをABCの三段階で評価した。第一次選考では、授賞候補論文数の2倍程度を選ぶこととし、5名の委員の評価の平均が高い方から、卒業論文20編、修士論文21編を選定し、これを第一次候補論文とした。

第二次選考では、各第一次候補論文について、選考委員の各専門分野を考慮しながら、それぞれの論文の内容に近い専門性を有する選考委員2名を選び、その2名の委員が論文本文を精読し、評価した。評価は、卒業論文については「テーマと内容」

「論理性と明確さ」「論文としてのできばえ」の3項目、修士論文については「テーマの獨創性・新規性」「豊かな萌芽性・将来性」「研究の進め方の論理性」「結論の明確さ」「論文としてのできばえ」の5項目を各五段階評価し、そのうえで三段階の総合評価を行った。また、各選考委員は査読論文に対する講評を作成した。

そして、計画系第二回選考部会において、査読の評価・講評・論文本文などを参照しながら、出席委員全員で投票を行い（ただし、論文の著者と師弟関係などにある委員が該当論文へ投票することは認めない）、ここで過半数の推薦を得た卒業論文8編、修士論文10編の合計18編を計画系の授賞候補論文として推薦することとした。

計画系の論文数が多いことと論文の内容が多分野にわたっているため、選考委員の負担は非常に大きくなっている。ただ、若い学生・院生の力作に触れる喜びだけが、委員の救いになっている。

(計画系部会長 川本重雄)

環境系部会

本年の環境系の応募論文数は、卒業論文19編、修士論文12編の合計31編であり、昨年（卒業論文12編、修士論文19編、合計31編）に比較すれば卒業論文と修士論文の応募数が逆転している。応募論文の研究分野は、温熱10編、音・振動7編、光4編、空気4編、その他が計6編である。

第一次選考では、4名の選考委員全員がそれぞれ全応募論文の概要を査読して三段階の評価を行い、それぞれ、その評点の高いものから授賞候補論文数（卒業論文3編、修士論文2編）の約2倍に相当する卒業論文5編、修士論文3編を第二次選考対象として選定した。

第二次選考では、第一次選考で選定された論文のそれぞれについて、2名（内容の専門性が近い選考委員1名、外部専門委員1名）の査読委員を選出し、精読するものとした。外部専門委員のうち1名には2編に対する査読を依頼したため、外部専門委員の延べ数は7名である。卒業論文については「テーマと内容」「論理性と明確さ」「論文としてのできばえ」の3項目、修士論文については「テーマの獨創性・新規性」「豊かな萌芽性・将来性」「研究の進め方の論理性」「結論の明確さ」「論文としてのできばえ」の5項目の各評価項目について五段階評価し、そのうえで総合評価（三段階）を行うとともに講評を作成した。以上の評点、総合評価、講評に基づき、とくに評点の接近している場合や2名の査読委員の評価が分かれたものについて慎重に審議のうえ、選考委員の無記名投票を行い、卒業論文3編、修士論文2編を授賞候補論文として推薦することとした。

今回も優劣をつけ難い論文が多く、選考委員には苦悩のご決断を迫らざるを得なかった。真剣な議論をいただいた選考委員、また、短期間にご精読のうえご丁寧な講評をお寄せいただいた外部専門委員のご協力に深く感謝の意を表したい。

(環境系部会長 寺尾道仁)

推薦理由 (優秀卒業論文賞)



2次元フーリエ変換による外装材の汚れの定量的評価に関する基礎的研究

正会員 北垣亮馬 君 (東京大学)

建築物の長寿命化が求められている現在、コンクリート構造物の汚れを評価して適切な管理を行うことの必要性が高まっているものの、定量的な測定・評価手法は、未だ確立されていない。本論文は、2次元フーリエ変換を使用した画像解析によって、外装材の汚染度を自動測定する方法の確立を目指した基礎的研究である。本研究では、周波数という概念を「ものの見え方」の評価に応用し、人間の視覚における距離減衰の仕組みを定量的に考察するなど、きわめて高いレベルで意欲的な取り組みを行っている。使用したプログラムソフトを含め、既往の研究成果との関係が必ずしも明瞭にされていない点に若干の問題があるものの、内容そのものはきわめて興味深く、将来性のある研究であると評価された。

建築骨組における半剛接合部の最適配置設計

正会員 山東 篤 君 (広島大学)

鋼構造骨組に半剛接合部を用いることによる利点が多いが、剛性の低下による変位の増大という問題点がある。本論文では、骨組全体における半剛接パラメータの総和を制約し、骨組の剛性を最大化するような半剛接合部の最適剛性分布を求め、その特性を調べている。はり要素の定式化、半剛接最適配置問題の定式化、最適配置設計、最適配置解の比較などを行い、この種の接合部を含む骨組設計の問題について有用な手法を提案している。興味深いテーマを取り上げて計算例を積み重ね、論文の構成も練られており、優秀卒業論文賞にふさわしい論文と評価できる。

滋賀県内における地震被害予測に関する基礎的研究

正会員 森井雄史 君 (滋賀県立大学)

兵庫県南部地震を契機に、これまで大きな地震被害をほとんど経験していないような地域でも、震災対策への感心が高まっている。こうした背景のもと、本論は、滋賀県内に設置されている地震観測計の波形記録をもとに、同県内の表層地盤動特性の推定、および被害を起こす可能性のある複数活断層を起震断層とした場合の彦根市の強地震動予測、ならびにこれに伴う同市木造建物の被害推定を行っている。手法面での新規性はとくにないが、広範な文献・資料をもとに精力的にまとめたもので、論理性に優れ大学の地域性にも立脚した好感の持てる卒業論文である。今後、滋賀県の震災対策の資料として役立つものと言えよう。

媒介空間に着目した都市建築の再編方法に関する研究 横浜関内地区の高度複合利用街区を事例として

正会員 阿部俊彦 君 (早稲田大学)

立体的な土地利用と建物利用の現状分析をしっかりと実施したうえで、「多様性」と「開放性」をキー概念としながら中間領域としての媒介空間に着目して、中心市街地の再構築を提案している本論文は、魅力的かつ示唆的である。また、単なるシミュレーションに終わるのではなく、補章として集住に関する考察を付加している点も、それなりに評価できるものである。尺度や視点がやや曖昧ではあるが、卒業論文として捉えた場合、高い評価が与えられる。

近隣商店街及びその周辺における自転車行動領域・ 選択経路に関する研究

正会員 安藤康隆 君 (九州大学)

本論文では、自転車による商店街への来街者に対するヒアリング調査を行い、最短経路をとらない来街者が過半数を占めていることを明らかにしたうえで、その要因として、遠方の来街者は、舗装がよく分かりやすい幹線道路を利用すること、住区内では交通量や信号の比較的少ない生活街路を利用していることを明らかにしている。2つの商店街を対象としたケーススタディではあるが、調査結果に基づき商店街を中心とした自転車で快適に生活できる街づくりの提案まで行っており、ポスト・モータリゼーションの時代に対応することを念頭にいた優秀な卒業論文として評価できる。

小学校・中学校における防災教育のあり方 命を守る ことの動機づけのために

正会員 石澤栄里 君 (日本女子大学)

本研究では、まず、阪神・淡路大震災後の被災地とそれ以外の地域の小・中学校における防災教育の実態を比較調査・分析している。その結果、被災地以外の地域では、副読本が配布されるにとどまり、その利用頻度も低い実態を明らかにしている。そのうえで、実際的で児童・生徒が自主的に取り組めるマルチメディア教材を提案している。豊富な調査で現状と問題点を把握し、それを打開するための具体的な提案につなげている点が評価できる。提案に対する児童・生徒の評価、反応の今後、検証が待たれる。

「まちの記憶」橋本のまちと町家 近・現代資料に見る橋本の旅館 橋本市旧大和街道沿い町家の変遷

正会員 梅嶋 修 君 (長岡造形大学)

正会員 西澤哉子 君 (長岡造形大学)

本論文は、和歌山県橋本市の土地区画整理事業で消えていこうとしている、江戸時代の町家を含む町並みを調査した研究である。現存する旅館建築や町家、合わせて100棟近い建物を長い時間をかけて調査しており、論文の中では個々の建物のデータ

に加えて町並みの連続立面図などが作成され、非常によく整理されている。町および町並みの歴史・旅館業の歴史についてもよく調査していて、詳しい記述が見られる。町並み調査の報告書としてみても十分な内容を持っており、完成度の高い優れた卒業論文である。

強制隔離療養所における居住空間の変遷に関する基礎的研究

正会員 境野健太郎 君 (京都大学)

かつて社会から強制的に隔離されたハンセン病者の療養所を取り上げ、60年間におよぶ居住空間の変遷を明確にし、10名の入所者への直接インタビューにより、彼らの生活の多面的な展開を詳細に明らかにしている。入所者自らの居住空間獲得過程が明確に示されているばかりでなく、入所者の高齢化から、個室化問題や介護との調整問題など高齢者施設計画の課題にも示唆を与える内容となっており、また施設史研究としても貴重な成果を得ており、優れた卒業論文として評価できる。

米国シアトル市近隣計画プログラムにおける合意性と実効性の確保

正会員 鈴木一郎 君 (東京理科大学)

正会員 東 孝 君 (東京理科大学)

正会員 山田照明 君 (東京理科大学)

本論文は、わが国の都市計画プロセスにおける住民参加と合意形成の課題を問題意識として持ちながら、先進地としての米国シアトル市の取り組み事例を文献調査や現地ヒアリングを丹念に行い、成果をまとめている。

海外事例調査にもかかわらず、そのプロセスや仕組みについて詳細に分析し、テーマに即して分かりやすくプロセスや仕組みを整理し、わが国の住民参加や合意形成の仕組みの検討に示唆的な考察を加えている点が高く評価された。特に、「合意」という理念の実現の仕組みや、計画実効性の担保の仕組みは、本論において明確に整理されており、研究者や実務者にとって大いに参考となることであろう。

商店街の販売形態・業種構成とその立地特性に関する研究

正会員 永田啓明 君 (九州大学)

郊外型大規模商業施設集積による、従来の商店街の買い物客流出による衰退現象を防ぐため、地域密着型の商店街再生の可能性を、地域住民との交流拠点としての役割を果たすべきことに重点を置いて、調査・分析を行っている。買い物客の接し方(販売形態)および業種構成から商店街を類型化し、立地条件との関わりの有無を分析しており、各地区特性に相応しい商店街の形態を分析するための有効な知見を得ている。さらに、立地する地区の施設(学校数・生徒数など)との定量的関係、あるいは高齢化に対応する具体的方法を明らかにすることにより、計画指針を定める際の有効な資料となり得る。

老人保健施設における入居者の生活行動に関する研究 基本的な生活行動特性と新築移転における心身への影響

正会員 村松直美 君 (日本大学)

本論文は、老人保健施設の計画および運営のあり方を考えるために、入所者の生活行為の調査を行い、施設利用の問題や新築移転に伴う心身への影響を明らかにしたものである。調査対象の施設は職員参加でプランニングされたものであるが、それが実際に使われるとどのような問題があるかを、入所者、家族、職員に対してのアンケート調査と入所者の生活行動の分析より明らかにし、問題発生の原因と解決方法を検討している。問題をハードな側面とソフトな側面にわけ、両面の問題を緻密で丁寧な調査により相互の側面から分析しており、優れた卒業論文と評価できる。

水平振動感覚の言葉による分析 揺れ性能に関する要求レベルのわかりやすい表現

正会員 岡村彰子 君 (日本女子大学)

本研究は、性能設計において要求されるユーザーと設計者とのコミュニケーションを円滑にするという今日的な意義および目的が明確であり、系統的な実験計画およびその実施と分析において堅実な研究姿勢が示されている。多種多様な自由コメントといった定量化の困難なデータ群から、より実情に即した生の評価の傾向を見落とすことなくうまく把握している。結果はおおむね予想どおりであるが、いくつかの点で揺れのニュアンスを表す言葉の違いを示すことに成功している。文章、図表とも明快で論文としてのできばえも優れている。

親密度を統制した単語の了解度と聴き取りにくさの関係

正会員 小林正明 君 (神戸大学)

公共空間の音声伝達性能評価における新たな心理指標として「単語の聴き取りにくさ」を提案し、その有効性について検討している。この指標は音と空間の豊かな実体験と真の理解により初めて着想されるものと考えられ、新規性に優れている。親密度で統制した単語による「聴き取りにくさ」試験が伝達性能評価における精度と感度に優れること、STIが直接音と残響音との音圧比に対応できないことなどの重要な知見を得ている。その被験者実験や考察は的確で、そこから導出された結論の信頼性は高く、この分野の発展に繋がる卒業論文として高く評価される。

明瞭度・了解度による高齢者の受聴特性に関する研究 親密度で統制した単語了解度による評価

正会員 佐藤逸人 君 (東北大学)

高齢者の音声受聴特性を把握するため、その評価試験法として親密度で統制した単語了解度を取り上げ、これと無意味3音

節明瞭度および STI との比較試験のうえ、単語理解度により高齢者と健聴者との比較を詳細に行っている。明確な目的設定と的確な考察により、高齢者の単語理解度の低下は 2 kHz の聴力損失に基因すること、健聴者と同等の理解度を得るためには SN 比で 5 dB、STI で 0.2 に相当する音声伝達性能の向上が必要であることなど、設計上重要な知見を得ている。今後の実音場への適用・発展が期待される優秀な卒業論文として評価される。

推薦理由 (優秀修士論文賞)



エネルギーに立脚した RC 造建物の耐震性能検証法に関する研究

正会員 石倉 敦 君 (早稲田大学)

本論文は、建築物の耐震性能を簡便かつ正確に示す設計法 (応答予測法) として提案されている ADRS format および VDRS format の予測精度の向上を目指して、RC 柱部材の吸収エネルギーと耐力低下の関係を実験に基づいて定式化し、それをもとに解析用復元力特性を構築し、その復元力特性を利用して、制震装置等の新技術による効果の評価法および片流れ応答時の予測精度の向上の手法を提案している。実験から解析まで精力的に取り組み、充実した成果が得られている。修士論文として論文内容および完成度とも優れている。

溶融亜鉛めっき鋼材表面の画像解析を用いた劣化度評価システムに関する研究

正会員 上林彩子 君 (東北大学)

鉄塔などの鋼構造物の保守・管理においては、定期的に実地検査を行い、腐食部材の取り替えや現地塗装などの必要性の有無、部材の余寿命診断を行うことが重要である。これまで、長年の経験をもった熟練者が、このような劣化度の判断を行ってきた。しかし最近では、熟練者の減少や評価の個人差といった問題も生じている。本論文では、鉄塔で使用されている溶融亜鉛めっき鋼管の内面を、管内カメラなどで撮影し、そのカラー画像を用いて、RGB 表色系の画像解析による劣化度評価システムを構築している。対象とする鋼材表面の劣化度の定義、評価手法、その精度などについて明確かつ論理的な記述がなされている。研究レベルの高さに加え、将来的にも発展性の高い論文であると評価された。

制振ダンパーを組み込んだ鋼構造骨組の耐震性能に関する研究

正会員 山口路夫 君 (東京工業大学)

建築構造の部分骨組を振動実験の対象として実時間地震動入力を行うことにより、従来型の設計方法による純ラーメン骨組と損傷制御設計法による骨組の耐震性能の比較検討を行うこと、ならびに、骨組に組み込まれた軸降伏型履歴ダンパーの低サイクル疲労特性の評価を行うこと、の 2 点を主な目的とする研究論文である。周到に計画された振動台実験システムの動作

特性の評価、ならびに、これを用いた損傷制御型設計法と軸降伏型履歴ダンパーの有効性の確認を行っており、いずれも明確な問題提起と明快な論理構成による結論の誘導がなされている。質量共に高いレベルの修士論文である。

台湾における「まちづくり」の特徴及び課題 行政主導の「まちづくり」政策に着目して

正会員 嘉茂信哉 君 (東京理科大学)

これまで取り上げられることが比較的少なかった台湾の「まちづくり」について、精力的に調べ上げ、精緻な分析を実施した労作である。「社区発展」政策、「社区給体营造」政策、「地区環境改造計画」、「創造城郷新風貌計画」を分析することにより、台湾における「まちづくり」の特徴や課題等を整理しているものであり、優秀修士論文賞に値するものであると判断する。

ミース・ファン・デル・ローエの建築思想に関する一考察 — <Baukunst> の概念について

正会員 丹野浩二 君 (京都大学)

本論文はミースの全言説を対象とし、これを詳細に論じたものである。生前のミース自身はただの 1 冊も本を著すことをしなかったが、彼が遺した言葉は F. ノイマイヤーによって丹念に集められ (1986)、その英訳 (1991年) も出版されている。この先行研究に基礎を置きながら、論者はミースが考えていたと推定される建築の像に迫っていく。ここには彼が設計した数々の建築作品は登場しない。ミースがたえず脳裏に浮かべていたに違いない Baukunst のあり方をめぐり、思考の広大な視野における探索が試みられている。

高齢者の生活における「地縁」の構造に関する研究 農村地域にみる高齢者の生活と地域とのつながり

正会員 登張絵夢 君 (東京都立大学)

本研究は、高齢者福祉を考えるうえで、「地縁」の構造を明らかにして、地域社会のあり方や支援システムを構築しようとする基礎的な研究である。4 つの自治体を対象に膨大なアンケートを行い、高齢者の特性を把握したうえで、地域を絞り込んで高齢者の生活実態を詳細に分析している。生活行動をとおして生活環境と人間関係を考察する中から、住み慣れた地域で暮らし続けられることの重要性を導き、施設化に偏重しがちな高齢者福祉に新たな切り口を示しており高く評価される。

近世城下町における街区構成に関する研究

正会員 瀬本幸子 君 (北海道工業大学)

日本の城下町では迷路状の街路が見られ、これは防衛上の理由から計画されたと考えられてきた。本論文はこの通説に対して正面から疑問をおつけている。例えば、ヴェネツィアのような自然発生的な展開を遂げた都市でも同じ迷路状の街路が形成されており、なぜ城下町の街路について意図的に錯綜した計画

がなされたと思わなければならないのか、と。全国の城下町の街区形状をつぶさに検討しつつ、その計画は街路を主体として組まれたわけではなく、街区の割り付けの結果、街路が迷路状になったのだと本論文は述べる。注目すべき爽快な修士論文である。

現代アメリカ合衆国の都市計画におけるニューアーバニズム論に関する研究

正会員 新島亜希子 君 (九州芸術工科大学)

米国の都市計画、都市開発分野で最も今日的なテーマを扱った論文である。わが国では未だ詳細に紹介されていない「ニューアーバニズム」に関する文献を詳細に調査し、その関連キーワードや実例の分析と意義の解説を試みている点が高く評価された。特に、米国で展開されているニューアーバニズムの理論と、同時に話題となっているトランジット・ビレッジの2つの理論について、双方の理論を独自の観点で考察する中で今日的な2つの計画論と計画手法の特色と課題を浮き彫りにしている点は、専門家にとっても大いに参考となる内容として整理されている。

中世和様仏堂を主とした軒の設計方法に関する規範的考察 国宝西明寺前身堂隅木を中心課題として

正会員 西澤正浩 君 (早稲田大学)

本論文は、中世の和様仏堂の軒の形の設計方法、特にその隅の部分の納まりと形態の決定方法およびその変遷過程を、規範術の視点から解明しようとしたものである。研究の資料として取り上げられているのは、滋賀県西明寺本堂床下に保存されている前身堂の隅木、修理工事報告書に収められている図版類である。筆者はこうした資料から軒隅部分の寸法を詳細に解析し、どの部分の寸法を優先して軒が設計されているかを明らかにする。そのうえで、どの部分の寸法を優先するかによって、軒の設計方法が五つの型に分けられること、そこに歴史の変遷過程が見られることを明らかにしている。限られた資料を使って、難解な問題に取り組み、一定の成果を上げた努力と熱意を評価した。

市町村連携型住宅政策に関する研究 大阪府における住み替えの市町村関係分析を通じて

正会員 橋爪直洋 君 (京都大学)

本論文は、広域都市圏において市町村の地域性を保持しつつ適正圏域の住宅政策が必要であるという観点から、大阪府下44市町村を対象に、住み替えのネットワーク分析を通じて市町村関係のあり方を探り、連携型住宅政策を実現する方法を提示している。調査、分析、論述がきめ細かく展開され、妥当な研究成果を導いている。共同的・協調的広域行政がますます必要とされる今日、小住宅市場と連動する連携体系を住み替えデータのネットワーク分析で構築する方法を見出し、住宅施策メニューごとの市町村連携を支援するツールとして有効な手法を

提示し得たと評価したい。

フィージビリティスタディにおけるホテル事業の関係主体の採算性とヴォリュームモデルの関係の研究

正会員 松下大輔 君 (京都大学)

本論文は、複合建築のフィージビリティスタディにおいて、形態と収支という相互に依存し合う二つの側面を調整する手法を提案している。従来の限られた建築形態のみを対象としたフィージビリティスタディに、GAを用いることにより、より広範な建築形態を対象に実現の可能性を検討する道を開いたことは大いに評価できる。フィージビリティスタディにGAを導入した点に新規性があり、さらに、既往論文の整理もきちんと行われ、結論にいたるまでの構成もしっかりしており、論文としてのできばえ、将来性の双方において優れている。

アルヴァー・アールトの規格住宅における「標準」概念の表出

正会員 松本 淳 君 (東京工業大学)

本論文は、A. アールトの規格住宅というこれまであまり知られなかった仕事を全面的に明らかにしようとした論文としてきわめて貴重である。焦点を当てているのは「A.A. システム」と呼ばれる木造戸建ての規格住宅である。A. アールトの主要な論考が精査され、「標準」という概念に絞った考察が密度高く重ねられている。「量産性と個性性」の関係が中心テーマである。言説に関する分析は、A. アールト論集の刊行（およびその英訳）によって可能になったもので、分析は英文のみに限定されるが主要な論文は網羅している。また、論者はフィンランド留学によって第一次資料に当たっており、資料批判には信頼が置ける。優秀修士論文賞に値する論文として高く評価したい。

性能的火災安全設計法のケーススタディ 大規模商業施設への適用

正会員 水野雅之 君 (東京理科大学)

本論文は、性能的火災安全設計法について精力的にケーススタディの作業を行った力作である。ケーススタディにあたって商業施設の設計を行っているが、火災安全性のみならず、総合的な性能による設計方針を提示し、性能的枠組みに従った建築設計を行っている点が秀逸である。設計案についての避難安全性や構造安定性などの性能検証過程においては、本会における研究会活動に依拠していると考えられる部分もあるが、共同研究のなかでこれらをまとめ上げたのは著者の構成員と努力の成果であり、優秀修士論文賞にふさわしいものと判断した。

密集市街地におけるエネルギー消費および温熱環境の実態調査と外部温熱環境の解析

正会員 西村秀彦 君 (京都大学)

本論文は、いままであまり明確にされてこなかった密集市街地(大阪市)のエネルギー消費量と温熱環境の実態調査を行い、冷房用エネルギー消費量がより多くなっていること、暖房用エネルギー消費量はより少なくなっていることなどを明らかにしている。さらに、特に夏期の路地空間の温熱環境をとりあげ、調査結果を用いて温熱環境の解析を行い、路地空間の温熱環境を支配している因子を明らかにするとともに、空調排熱が及ぼす影響を推定し改善策を呈示している。研究の進め方もよく結論も明確に述べており、優秀修士論文賞に値する。

周囲環境を考慮した住宅の熱負荷シミュレーションに関する研究

正会員 樋口佳樹 君 (早稲田大学)

本論文は、重要と認識されているものの、いままであまり行われてこなかった建築物外表面が受ける日射および長波長放射の実用的な算出法を検討し、不特定の壁面位置関係を満足する汎用プログラム用に、単なる計算原理のみならず起こり得るすべての位置関係を満足するアルゴリズムの開発を行ったものであり、評価に値する。さらに、既存の汎用熱計算に組み込み、周囲環境を考慮した住宅の熱負荷シミュレーションを行い、隣接住宅の影響が大きいことを示した実用的意義は大きく、優秀修士論文賞に値する。